

第3章 全失語症者の固有名詞の理解

3.1 失語症者の固有名詞に関する文献

全失語は左半球の広範な損傷によって生ずる失語症の最も重度な状態で、不可逆的失語ともよばれる。言語機能の表出面、受容面などほとんどの側面が重篤に障害され、機能的な言語が全廃に近い場合を指す。発話はそれらしいイントネーションや、感情的な表現が伴うこともあるが、状況に関係なく一定の語句を繰り返したり、時に間投詞を話す程度である。したがって、全失語症者からの言葉による意志伝達は困難を極める。復唱や音読も困難である。ジェスチャーや書字による表出も通常は不可能である。聴覚的理解力は発症初期には全廃に近いが、経過に従い単語の何割かを、理解できるようになる症例もいる。

当然ながら、一般名詞を用いた理解力検査において、全失語症者は重篤な障害を示す。しかし、それらの標準的な聴理解検査では触れられていない側面が、この群で保たれていることを示した研究もある。BollerとGreen(1972)は、重度失語症者が単語の音韻パターンを、音韻性ジャルゴンから区別できるとした。全失語症者がはい/いいえの答えを求める質問と、具体的な情報の提供を求める質問に対して異なった反応を示すことを示した研究もある(Green & Boller, 1974)。Delocheらは(1981)は、意味的関連語の音声リストの中から、無関係な単語に反応することができた全失語症例を報告している。同じような観察は語彙判断課題からも得られている(Blumstein et al., 1982)。

長い間、具体的で高頻度な一般名詞が全失語症者にとって、もっとも容易に理解されるカテゴリーであると考えられてきた。しかしながら、この

常識は根拠を失いつつある。以下のように一般名詞よりも、固有名詞のほうがよく理解できるという報告が出てきたからである。

Wapner と Gardner (1979)は、全失語症者の物品名と地名の聴理解を調べた。全失語症者は、単語や地名を聞いて、室内情景画の中の物品を指し示すことと、合衆国白地図上の都市の位置を指し示めすことを求められた。その結果、都市の位置を指すほうがよくできることが判明した。彼らはその理由を、全失語症者は視覚—空間能力が優位な右半球が残っているからとした。

Van Lancker と Canter (1982)は、ある調査の中で全失語を伴う5人の症例が、有名人の名前の視覚的認知にほとんど障害がないことを偶然観察した。ただし、考察はまったく行なわなかった。安田(1996)は2例の全失語症者において、地名と人名の理解の選択的な良好性を観察している。

固有名詞の理解力以外にも、固有名詞に関しては、興味深い報告がいくつかある。Saffran ら(1976)は単語を例えば、色名(brown)と人名(Sam Brown)のような2種類に偽装し、非流暢性失語症者に音読してもらった。その結果、明らかに人名のほうがより正確に音読できたとした。McKenna と Warrington (1978)の一症例は、一般名詞は想起できなかったが、国名は想起することができた。以上の結果は、固有名詞が大脳内において、一般名詞などとは異なって処理されていることを推測させる。

タキストスコープによる研究では、一般名詞と同様、左半球が書かれた人名の認知に優位であることが報告されている (Hay, 1982; Newcombe et al., 1989; Schweinberger, 1995)。rCBF(Sergent et al., 1994)やPET(Tempini et al., 1998)による研究でも同様の結果が出ている。

他方、右半球でも具体語や高頻度語などをある程度認知できるとする説が従来からあった(Code, 1987 参照)。書かれた人名に関しては、右半球

でも左半球と同じレベルか (Bradshaw et al., 1977, Saffran et al., 1980)、または、多少劣るがそれらを認知できるとした報告もある (Hay, 1982; Newcombe et al., 1989)。

ところで、健常者でもある特定の単語名が想起できない時がある。特に高齢の健常者や、人名の想起の際その頻度が増えることが確かめられている (Choen & Faulkner, 1986; Burke et al., 1991; Bredart, 1993)。ある実験では “Potter” という人名は、“potter” という職業名よりも思い出すことが困難だった (McWeeny et al., 1987)。なぜ、人名の想起が困難なのか現在も議論が続いている。

以上の文献は、(1)最重度の失語症である全失語症者は、一般名詞などの理解に困難を呈するが、地名などの固有名詞は比較的理解できる可能性がある、(2)固有名詞と一般名詞の臨床的、さらには言語学的な差異は、脳の機能分化に関係している可能性がある、(3) 健常者でも高齢化したがい人名の想起が困難になる、などの問題を投げかけている。現在まで、これらを包括的に説明するモデルは提出されていない。筆者は本章において、これらの問題を実験や文献などから考察し、神経心理学的モデルを提示することを目指す。